

現職保育者と創る保育者養成授業

—実践記録ビデオを用いた事例紹介と被写体保育者の授業参加—

志村 聡子

(東京学芸大学大学院)

目的

本発表は、私が保育者養成授業（科目：「保育内容人間関係」）において行った授業実践の報告である。本発表の目的は、保育者養成授業を学生にとって魅力的なものとするために、現職保育者の協力を得ることを提起する点にある。まず、保育者の協力を得ることに関わって、論じておきたい。

私は、かつて「教師と研究者の共同研究」に参加したことがある。しかし、「共同」を志向しながらも、両者の視点の相違点が明らかになり、むしろ「共同研究」の難しさを再確認することとなった。

振り返って個人として反省したことは、次のような点である。「研究者」は、できれば保育者の研修や「気づき」に貢献したいと願うが、実際、保育者自身が連携を求めたときにしか第三者は貢献できない。そこに既に連携のむずかしさがある。しかも、「研究者」という呼称は、時として階層構造を想起させるように思われた。以後、保育者との連携のあり方について、継続して課題としてきた。

ところで、私は、関東地方の短期大学において、非常勤講師として保育者養成のための授業を担当している。こうしたことから、「研究者」としてでなく、保育者養成課程に関わる教師（授業者）として、魅力ある授業を学生に提供するという学生の利益から出発して保育者に協力を要請することにし、そこに連携の可能性を模索することにした。協力を求めたのは、以前から親交のあった、保育歴 20 年の S 保育者（女性）である。S 保育者には、ビデオ録画とその被写体となることを承諾してもらい一方、将来的にそのビデオ教材を授業において用いる際、授業にゲストとして招くことを録画に先立って約束した。授業参加の機会を録画に先立って約束することは、学生を育てるという目的を共有することに有効であると考えた。さらに、ビデオの被写体となることは、大きなストレスとなるも

のと考えられるが、映像の利用方法への危惧もその不安を増幅させるものと判断した。そこで、ビデオ映像に関わって、保育者自身の保育の意図を伝える機会を保障することが、被写体となる苦痛をわずかでも軽減するものと考えた。

方法①—授業のための準備段階

2002 年 1 月中旬から 2 月中旬まで、さいたま市内の幼稚園（私のかつての勤務園）に通い、ビデオ映像にその保育実践を記録した。この時期をとらえた理由は、年長の子どもたちが、保護者を園に招いてお店を開くなどする行事がこの時期に恒例となっており、その準備の過程を追いたいと考えたからだ。実際には、グループわけの日（1 月 18 日）に始まり、1 月 21 日、22 日、24 日、25 日、28 日、29 日、31 日、2 月 4 日、6 日、7 日、8 日、12 日、13 日、そして行事当日の 14 日までの計 15 回赴き、保育実践をビデオ録画した。この間、S 保育者と話し合いをする時間を子どもたちの降園後に 4 回設けてもらうことができ、貴重な情報収集の機会を得た。

被写体となったのは、年長の子どもたち 93 人と、保育者 4 人である。当初、被写体となることを予め承諾してくれた S 保育者の担任するクラスだけを追うつもりであったが、3 クラスの枠を取り払って活動することと、他の 3 人の保育者（保育歴 3 年、2 年、1 年、すべて女性）の撮影を避けることができなくなった（保育者の撮影については、園長の許可はあったものの、事前に 3 人との十分な意思疎通があったとは言いがたかったので、至近距離で撮ることを控えるなど、配慮を重ねた）。

子どもたちは、各自の希望を生かし、テレビ局、ゆうえんち、ゲームやさん、アクセサリーやさん、レストラン、おばけやしきの各グループに分かれて活動した。4 人の保育者が、担当グループを決めて子どもたちに関わった。

ビデオ録画を終えたのち、ビデオの編集を行った。さらに、報告として、4 人の保育者と園長に、編集ビデオ（77 分、一連の流れを網羅的に編集したもの）を贈呈した。

1 齋藤正典・小谷宜路・志村聡子・内村朋子・林信二郎「幼稚園教師と観察者の間に見られる事例解釈の相違点についての検討—教師と研究者の共同研究のあり方を考える—」『埼玉大学教育実践研究指導センター紀要』第 14 号、2001 年。

方法②—保育者養成授業の内容

担当科目「保育内容人間関係」は2年生対象で、後期に開講された。この科目の授業形態は、クラス（約30名）ごとの対応であった。

2002年度（平成14年度）は、当該科目では3クラスが開講された。11月中旬にS保育者を招くものとし、それまで、編集した実践記録ビデオを用いて事例紹介を行った。学生にはおおむね好評であったと考えられるが、反省点を踏まえて改良した、次年度の授業内容を中心に報告したい。

2003年度（平成15年度）は、当該科目では4クラスが開講された。前年度の反省として、ビデオ教材の継続視聴が長くなると、学生の集中力が続かないことがあった。このことから、ビデオ教材は正味10～20分に編集し、テーマを絞り、ビデオをとめながらできるだけ詳しく解説を加えることにした。

S保育者を招くまでに講義は6回あり、毎回テーマを絞って事例紹介した。1回目は、行事当日の映像で、保護者を招いて生き生きと活動する子どもたちの姿を紹介した。2回目は、さかのぼって初日のグループわけの活動をとらえ、保育者の保育の意図について伝えた。3回目は、あるグループが活動の方向性を見失っている姿を紹介し、保育者の果たすべき役割について伝えた。4回目は、引き続きその停滞したグループのいざこざ場面をとらえた。5回目は、活動に熱中する別のグループの活動をとらえ、あらためて保育者の役割について伝えた。6回目は、極めて個性的な子どもの傍らで自己発揮できない子どもの事例を紹介し、保育者から詳しく伝え聞いたその関わりについて伝えた。これらの事例を通して、保育の現場における「人間関係」には、子ども同士のかかわり、子どもと保育者のかかわり、子ども集団と保育者のかかわり、そして保育者同士のかかわりなど、重層的に多様な関係が存在することを伝えるものとした。

こうした事例紹介を踏まえ、その当事者であったS保育者を招いた。S保育者がクラス担任をしていたため、彼女の休日となる土曜に補講を組み（11月22日）、予め打ち合わせた内容に沿って話してもらった（補講の折は、2クラス合同で、2回授業を行った）。一連の学習は、S保育者を招いて話を聞くことで終えるものとし、後半は新たな学習課題に取り組んだ。

結果—学生の授業評価から

一連の学習を踏まえ、学生に無記名で授業評価アンケートを実施した（12月1日）。質問項目は5つで、

うち4つは5段階で評価してもらった。質問内容は、①ビデオ教材の有効性を問うもの、②事例紹介する授業者による解説のわかりやすさを問うもの、③招いたS保育者の話が、事例の理解に効果的であったかを問うもの、④一連の学習についての意義を問うもの、⑤自由記述であった。

①ビデオ教材の有効性について、「とても効果的だった」は全体の47%、「効果的だった」は42%で、合わせると89%となった。②授業者による解説については、「とてもわかりやすかった」が32%、「わかりやすかった」が54%であった。③S保育者による話については、「とても効果的だった」が60%、「効果的だった」が34%で、合わせると94%に上った。④これらの学習の意義については、「とても意義あるものだった」が57%、「意義あるものだった」が32%で、合わせると89%が一連の授業実践について好意的に受け止めていたことがわかった。

考察

学生には、S保育者に直接話を聞くという試みが大変好評であった。また、市販のビデオ教材を用いるのではなく、授業者が直接録画するなどして情報収集した努力も、報われたように思われる。しかし、その準備の実際は、時間と体力の大きな負担を伴うものであり、時間的余裕のある大学院生兼非常勤講師だから可能であったとも言える。ともあれ、学生に魅力的で実際的な授業を提供するためには、周到な準備ないしは研究活動が欠かせないことから、授業実践に伴う制度的な保障を提起しておきたい。

さらに、授業者である私本人による解説には、まだ改善すべき余地があるようだ。1年目の授業実践では、ビデオ映像を詳しく解説することをしなかったため、事例をどう読み取ってよいのか迷う学生の姿が見受けられた。2年目の授業実践では、数秒ごとに映像を停止して、知りうるすべての情報を加えるほど詳しく解説することに努めた。これを好意的にとらえた学生がいた一方で、その方法に改善を求める意見もあった。

今回は、かつて私が勤務した幼稚園で情報収集を行ったため、多くの意味で恵まれていた。しかし、今後は、新たな環境で取り組むことに挑戦したい。

今後も、魅力的な授業実践を行うために、現職保育者との連携を模索していきたい。

最後に、情報収集や授業実践、本発表において、ご理解、お力添えをいただいたすべての方々に感謝申し上げます。